

緑のリスト・環境保護/緑の党の党员・支持者とは どのような人々だったのか？

Wer sind die Mitglieder und Anhänger der Grüne Liste Umweltschutz/ Grünen?

中田 潤

Abstrakt

In diesem Aufsatz haben wir die Zusammensetzung der Mitglieder und Anhänger der Grünen und ihrer Vorgängerpartei GLU aus zwei Perspektiven analysiert. Der erste ist, sich auf die individuellen Eigenschaften von GLU-Mitgliedern und Unterstützern zu konzentrieren. Dort wurden die Merkmale von Parteimitgliedern und Anhängern anhand von Indikatoren wie Alterszusammensetzung, Geschlecht und Beruf erfasst. Ein anderer Gesichtspunkt war nicht die Eigenschaften von Individuen, sondern die sozialen Verbindungen, die sie geschaffen hatten.

Als Ergebnis einer Analyse unter dem Gesichtspunkt der sozialen Verbindung wurden viele Beispiele aufgezeigt, dass eine Community von Bewohnern, die in einer Entfernung von etwa mehreren hundert Metern in einer Stadt leben, als ein Netzwerk von GLU-Unterstützern insgesamt fungiert. Es wurde auch festgestellt, dass sich die urbane Lebensgemeinschaft der GLU-Anhänger relativ auf Gebiete mit einem hohen Anteil an Mittelschicht- und Universitätsgebieten konzentriert. Neben diesen Nachbarschaftsgemeinschaften spielten auch das Familiennetzwerk und das Seniorennetzwerk eine wichtige Rolle beim Ausbau der GLU-Unterstützung. Darüber hinaus wies er darauf hin, dass die wichtigste Existenz aus Sicht des sozialen Zusammenhalts der GLU-Anhänger die Wohngemeinschaft ist.

はじめに

1950年代以降、連邦共和国の産業構造は徐々に変化し始めていた。それは端的に言えば、全産業に占める第三次産業の比重の増大化と言えた。またそれは産業の重心が、知的集約型産業に移行していくことも意味していた。その結果として、高等教育を受ける人々の割合が増大していった。知的集約型産業は、一般的に業務に占めるデスクワークの割合が大きく、他の産業分野と比較した時、女性の参入障壁は低かった。それにより連邦共和国における第三次産業分野の躍進は、女性の就業率の上昇と手を携えて進んでいくことになった。

特定の社会集団の経済的な台頭と、その集団の政治的・社会的な影響力の拡大との間に、密接な関係にあることは、歴史学において議論の必要がないほど自明のことかも知れない。そうした意味において、女性の就業者数の増大、つまり彼女たちの経済的自立化傾向が強まったことは、この時期の政治的・社会的な変動の一つの要因となった。またこうした政治・社会領域における変化は、連邦共和国においては極めて激しい形で顕在化した。それは紆余曲折があったものの、その申し子と呼べるような勢力が、「緑の運動」および「左派オルタナティブ」として、まがりなりにも政治的に結集することに成功したと大きく関係していた。スヴェン・ライ

ヒャルトによれば、その活動内容および担い手という観点から見ると、左派オルタナティブ・プロジェクトは、その後の連邦共和国の産業構造・社会構造の先取りであった¹。

本稿では、GLUおよび緑の党の黨員・支持者等のデータを分析することを通して、「緑の運動」および「左派オルタナティブ」な運動を担った人々の社会構成について論じてみたい。その際に2つの観点から分析を進めていく。その第一はGLUおよび緑の党の黨員・支持者の個人の属性への着目である。ここでは年齢構成・性別・職業等などが指標となるはずである。もう一つの視点は、支持者・黨員個人ではなく、彼らが生み出していた社会的結合関係に着目することである。そこには、こうした社会的結合という視点への着目は、協同主義的社会秩序を支えるエートス的なものが、そこから明らかにされるはずであるという筆者の仮説が存在している。

主として利用したデータは2つのグループに大別される。その第一はGLUの黨員名簿である。黨員個人の属性まで明らかにできるデータは1978年7月時点のもののみが現存している。他方黨員の数だけであれば1977年から緑の党ニーダーザクセン州支部へと再編された1982年まで資料は存在している。もう1つのデータ群は、候補者推薦人名簿である。すでに述べてきたように、GLUは1978年6月のニーダーザクセン州議会選挙への参加を活動の主たる目標の一つとしていた。そのためには運動を盛り上げることが一義的に重要であったが、他方で候補者の選出には、その母体となる政党や支部の結成、さらにそ

うした組織を基礎とした各選挙区での候補者選出など、州の選挙法に規定された事細かな事柄をクリアしなくてはならなかった。そうした諸規定の中に、候補者は100名以上の推薦人を集めなくてはならない、というものがあつた。またその推薦人は当該の選挙区に居住しており、かつ署名の時点で最低3ヶ月間「州内」に居住している実績がなければならないとされていた。さらこの推薦人は、同時に他の政党の候補者の推薦人になることはできなかった²。こうした規定の存在から、筆者はこの推薦人となった人物を、GLUの中核的な支持者とみなす。実際彼らの中のかんりの者が、すでにGLU黨員であるか、その後GLUに入党していた。

本稿では、1978年6月の州議会選挙においてGLUが候補者を擁立ために作成した推薦人の名簿の中から、ハノーファー市内の3つの選挙区（1区ハノーファー中心部、2a区ハノーファー北西部、6区ハノーファー・リンデン）を取りあげ分析した。推薦人リスト自体は、州の選挙管理委員会に提出されたものであり、357名分が存在していた。またこのリストには推薦人の氏名、年齢、住所が自筆で記載されている³。

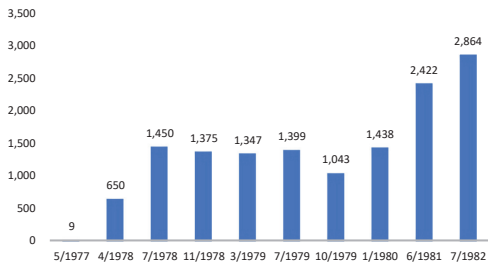
1. 個人の属性という視点からの分析

1-1. 黨員数

グラフ1は、1977年5月から1982年7月までのニーダーザクセンGLUと、その後継組織と言える緑の党ニーダーザクセン州支部の党

1 Reichardt, Sven/ Detlef Siegfried: „Das Alternative Miles. Konturen einer Lebensform“, in: Reichardt, Sven/ Detlef Siegfried (Hg.): Das Alternative Milieu, Göttingen 2010, S. 9-24, hier S. 10.
 2 GLU: Die Organisation der GLU und die Notwendigen Vorbereitungen zur Landtagswahl, o. D. (Vermutlich Ende 1977), in: NLA HA, V.V.P. 56, Acc. 5/88, Nr. 77.
 3 本稿における分析のために利用した史料は以下のものである。Unterschriftenliste für die Wahl zum Niedersächsischen Landtag am 4.6.1978, in: NLA HA, V.V.P. 56, Acc. 5/88, Nr. 77.

GLU/緑の党ニーダーザクセン州
支部の党員数の推移



グラフ1

員数を示したグラフである。1977年5月に、ベダーマンを中心とする有志数名によって結成されたUSPは、その後GLUの合流、そして1977年末から1978年初頭の郡支部結成ラッシュの中で、州議会選挙を迎える頃には600人を超える党員を抱えていた。1978年6月の州議会選挙での善戦は、この党への注目を高めることになり、入党者の続出により、党員数は1978年7月に1,450人に達する。量的に言えば党員数は2.5倍となった。さらにこの時期に入党した党員は、左派オルタナティブ傾向を持つ者が多かったため、選挙後のGLUはそれ以前とはかなり性格の異なる政党に変化していた。その帰結が、党内路線対立の激化であった。より具体的に言うならば、環境保護政策に党の政策を特化すべきなのか、それとも環境政策をより広義に定義するという名目で、左派オルタナティブ勢力の主たる関心であった社会政策領域に重点をシフトすべきなのか、という点の対立であった。その対立の一定の着地点はベダーマンの党からの排除であった。それに失望した、主として州議会選挙以前からの党員の離党によって、党員数は1978年秋から冬にかけて減少する。さらにGLU執行部は、1979年秋にAUD, GAZ, GLSHと合流して緑の運動の結集を図るという方針を決定するが、それに納得しない党員のさらなる離反を引き起こしていた。しかしながら1980年1月には連邦政

党「緑の党」の結成による高揚感、そしてその後連邦政党緑の党に期待する人々の大量入党が始まり、1979年末から、党員数は右肩上がりに上昇していくことになる。党員数という観点からすればGLUの歴史は1978年7月前後、そして1979年11月前後を境とする三つの時期区分が可能である。その間GLUという組織の連続性は保たれていたが、党一般大衆の構成やその政治的志向性は大きな変化を遂げていた。

1-2. 年齢

表1 GLU支持者の年齢・性別構成
(%: 1978年4月時点)

	女性	男性	不明	合計
80代	0.6	0.6	0.0	1.1
70代	2.5	2.0	0.3	4.8
60代	5.9	4.5	0.3	10.6
50代	7.8	7.0	0.3	15.1
40代	7.8	7.0	0.6	15.4
30代	12.6	10.9	1.1	24.6
20代	12.9	13.2	0.6	26.6
10代	0.6	1.1	0.0	1.7
合計	50.7	46.2	3.1	100.0

Unterschriftenliste für die Wahl zum Niedersächsischen Landtag am 4.6.1978, in: NLA HA, V.V.P. 56, Acc. 5/88, Nr. 77より筆者が作成

表1はハノーファー市選挙区に居住するGLUの推薦人の性別・年齢別を示したものである。18歳未満は推薦人としての資格を有していなかったため、10代としてカウントされているのは当時18歳と19歳であった推薦人のみである。それゆえに割合としてはかなり小さくなる。20代と30代は合計で51.2%、40代と50代は30.5%、60代と70代は15.4%、それ以上は1.1%となる。

表2は、1978年7月時点のGLU党員全体の年齢構成を示したものである。先に挙げた表1のデータは1978年4月のものであり、既に

指摘したように、この間GLUの党員は2倍以上増えており、その母集団自体が大きく変化していた。このデータによれば30代以下が、全体の70%を占めていた。つまり党勢の拡大は、20代・30代によって過剰代表される政党という性格をより強めていた。

表2 GLU党員の年齢構成
(%: 1978年7月時点)

年齢	割合
20歳以下	15.0
21-30	36.0
31-40	23.5
41-50	10.0
51-60	8.5
61歳以上	7.0

Hallensleben: Von der Grünen Liste zur Grünen Partei, S. 112より筆者が作成

こうしたGLUにおける若い世代の過剰代表という傾向は、ドイツ社会全体との比較においてのみ際立つものではなかった。既存の政党の党員との比較においてもそれは際立っていた。表3は西ドイツにおける投票者の年齢構成を政党別に示したものである。このデータは投票者を示したものであり、表1,2の支持者・党員数を示したデータと若干性格が異なるが、基本的な傾向を把握するには十分と考え、比較の対象とした。

35歳未満のFDPおよびCDUへの投票者の割合は、1980年から1990年の全期間にわたって、西ドイツ全体の当該年齢の住民の割合を常に若干下回っている。とりわけ1990年の選挙において、25歳から34歳のCDUに投票した者の割合は、西ドイツ全体の同年齢層の割合を5%近く下回っていた。他方45歳以上のCDUへの投票者、そして35歳から59歳のFDPへの投票者は、上記の全期間にわたっ

て、西ドイツ全体の当該年齢の住民の割合を常に若干上回っている。とりわけ1990年の選挙において、60歳以上でCDUに投票した者の割合は、西ドイツ全体の同年齢層の割合を6%近く上回っていた。それに対して、SPDに関しては、全期間にわたって西ドイツ全体の住民の年齢構成との差は、-2.4%から1.6%の幅に収まっている。「年齢構成」という観点から見れば、SPDは1980年代全般にわたって、国民政党であったと言えた。また上記のようなばらつきは見られるものの、CDU, FDPも大枠としては国民政党としてカテゴライズして問題ないと思われる。

それに対して緑の党の投票者に関して言えば、全期間において18歳から34歳は、西ドイツ全体の当該年齢の住民の割合を常に大幅に上回っている。その割合のうち最大のものは、1980年の連邦議会選挙における18歳から24歳の投票者で、実に+33.6%となっている。それに対して1990年の選挙において、60歳以上で緑の党に投票した者の割合は、西ドイツ全体の当該年齢の住民の割合を23%下回っていた。1980年代を通してこの数値は20%前後で推移しており、この傾向は一貫していた。

他の政党と比較において緑の党は、30代以下の支持者・投票者が極めて多いという特徴を示しており、その傾向は設立期においては、特に著しかった。また左派オルタナティブミリュー層の年齢が、時間とともに上昇することによって、緑の党への投票者の年齢層もそれに平行する形で上昇していったことが読みとれた。とは言え、1980年代という10年間に限れば、30代以下に過剰代表される政党であるという性格は維持されていたと言えた⁴。

4 Niedermayer, Oskar: Parteimitglieder in Deutschland, Version 2018, Berlin 2018, S. 42; Hallensleben: Von der Grünen Liste zur Grünen Partei, S. 112.

表3 投票者の年齢・政党別割合(%)

CDU				
	1980年	1983年	1987年	1990年
18-24	9.4	10.5	9.6	8.9
25-34	12.8	14.6	13.2	14.0
35-44	20.4	18.5	15.1	14.6
45-59	27.7	27.5	29.7	29.6
60-	29.7	29.0	32.3	33.0
SPD				
	1980年	1983年	1987年	1990年
18-24	14.3	12.7	11.9	11.1
25-34	17.5	17.1	17.9	21.2
35-44	18.3	16.4	15.6	17.4
45-59	25.1	26.8	28.3	25.7
60-	24.8	27.0	26.3	24.7
FDP				
	1980年	1983年	1987年	1990年
18-24	11.7	10.0	11.4	10.8
25-34	15.8	15.7	15.2	16.4
35-44	19.8	22.5	19.5	19.1
45-59	26.0	28.6	31.6	31.2
60-	26.8	23.3	22.3	22.5
緑の党				
	1980年	1983年	1987年	1990年
18-24	46.3	33.1	23.2	23.2
25-34	27.2	34.3	38.1	39.5
35-44	12.1	14.6	19.3	21.9
45-59	11.0	11.9	13.3	11.3
60-	6.5	6.1	6.1	4.1
西ドイツ全体の年齢構成				
	1980年	1983年	1987年	1990年
18-24	12.7	12.6	11.9	10.8
25-34	16.1	16.8	17.4	18.5
35-44	19.6	17.6	16.0	16.5
45-59	25.7	26.3	27.9	27.1
60-	25.8	26.6	26.9	27.1

Hoffmann: Die doppelte Vereinigung, S. 403より筆者が作成

1-3. 男女比

党員の男女比という点においても、GLU/緑の党は既存の政党と著しい相違を示していた。性別の判別が不可能なデータが一定程度あるものの、表1によるとハノーファーのGLU支持者の50.7%が女性であり、46.2%の男性を上回っていた。その後、表4が示すように、大量の新規入党者により女性党員の割合は37.5%にまで下がる。他方SPDにおける女性党員の割合は、連邦共和国建国以降15%~20%の間を推移しており、1978年時点の女性党員の割合は19%であった。CDUの場合、女性党員の割合はさらに低かったが、1978年の時点ではやや上昇しており、SPDとほぼ同じ割合になっていた。同じ年のFDPは22%、CSUは13%であり、同時期の既成政党との比較においてGLUの女性党員の割合の高さが際立っていた⁵。またこの傾向は今日(2020年)まで継続しており、CSUを含めた7政党の中で緑の党の女性党員の割合は一貫してトップであった。

表4 党員の男女比(1977/78)

政党	女性	男性
GLU/N	37.50%	62.50%
CDU	22%	78%
CSU	13%	87%
SPD	19%	81%
F.D.P.	22%	78%

Hallensleben: Von der Grünen Liste zur Grünen Partei, S. 111より筆者が作成

1-4. 職業構成

1978年7月時点、つまり党員の急増後のデータしか存在しないが、そこからGLU党員の職業構成を明らかにすることができる(表5)。GLU党員の職業面での分類において最大の集団は、「職業に就いていない者」で

5 Nieder Mayer, Oskar: Parteimitglieder in Deutschland, Version 2018, Berlin 2018, S. 62.

あった。その割合は48%で、全党員のほぼ半数にあたる。そのかなりの部分が主婦と学生であった⁶。それに次ぐ職業集団は公務員であり、全体の23%を占めていた。党の創設者ベダーマンもニーダーザクセン州職員であり、その一例であった。さらに注目すべき点はその職種であった。公務員であった党員の実に半数以上が教員であり、全党員に対する割合としては18%を占めていた。ベダーマンを継いで党代表となったオットーも教員であったし、実質的に党の実権を握っていたリップルトも教員であった。また市民エコロジー派の代表としてリップルト路線に批判的な立場にあったシェットラー夫妻も、活動に身を投じた時点ではすでに年金生活者であったが、元教員であった。これに限らずこうしたデータを裏付けるように、GLUの郡支部は、設立の段階で教員が支部長に就任し、そのかつての教え子が創設時のメンバーであるというケースが多々存在していた⁷。

また自らを手工業者・職人であると答えていた者が、党員の10%ほどを占めていた。彼らは一般的に労働者層と分類されるのであろうが、労働者層に属するGLU党員のほとんどがいわゆる熟練労働者であった。それに対して非熟練労働者である党員はほとんどいなかった。こうした緑の党の非熟練労働者層

表5 GLU党員の職業構成 (1978年7月時点)

職業	割合
無職 (学生・主婦)	48%
自由業	7%
社会的職業	4%
農林水産業	6%
職人・手工業者	10%
営業職	4%
公務員	23%

Hallensleben: Von der Grünen Liste zur Grünen Partei, S. 114より筆者が作成。小数点以下を切り上げたため、合計が100%を越えている。

内の過小代表傾向は、その後も続く傾向があった。

また「自然と関係する職業」に従事するものと回答していた党員が、全体の6%ほどいた。具体的には農林水産業従事者と言えたが、そのうち約半数が農民であった。環境保護と農業との親和性を考えた時、GLU党員に農民の割合が高いことが予想されるが、それは正しくなかった。党員全体に占める3%という数字は、西ドイツの全就業人口に占める農民の割合とほとんど変わらなかった⁸。ただしこうした農民党員は、GLSHの創設者の一人であったシュプリングマンを典型として、党活動において重要な役割を果たしていた場合が多かった。またこうした農民党員の

6 リップルトは、GLUの一部の支部が学生のみで構成されていることに言及していた。Lippelt, Helmut: Memorandum zur Frage. Wahlkampforganisation und Kostenerstattung, 5.3.1979, in: NLA HA, V.V.P. 56, Acc. 5/88, Nr. 83.

7 例えばオズナブリュック郡支部長のポレウスキ、副支部長のビルグリムは両者とも教員であり、ポレウスキはビルグリムの教え子であった。またメッペン郡支部長のブスマン(Bußmann, Werner)もハウプトシュレの教員であったし、ニーブルク郡支部長は大学教員であった。Schnieder, Frank: Von der sozialen Bewegung zur Institution? Die Entstehung der Partei DIE GRÜNEN in den Jahren 1978 bis 1980, Münster 1998, S. 13; „Neue Partei tritt zur Landtagswahl an“, in: Meppener Tagespost vom 9.3.1978; „Die „kleinen Grünen“ und die großen Aufgaben“, in: Die Harke, Ende März 1978. また以下のパイネ郡のGLU支部について報じた記事では、その職業構成として教員、学生、生徒の占める割合が極めて高いことを指摘していた。„Grüne sagen großen Parteien den Kampf an. Politik der Überlebenschance für die Menschen“, in: Peiner Allgemeine Zeitung vom 10.3.1978.

8 Hallensleben: Von der Grünen Liste zur Grünen Partei, S. 114.

経営は、エコロジー農業などを積極的に取り入れている場合が多く、とりわけパーデン・ヴェルテムベルク地方ではその傾向が強かった。さらに「自然と関係する職業」という分類は、詳しく見ると営林局職員や農業技術者として公務員の地位を有しているものが相当数含まれていた。この点を鑑みるとGLU党员に占める公務員の割合は、実際にはさらに高かったと言えた。

こうした職業構成から一定程度予想されることであるが、現役の大学生も含めた時、GLU党员の中で高等教員を受けたものの割合は、連邦共和国の住民平均との比較において著しく高かった。先に挙げたシェットラーの例のように、調査時点では年金生活者や主婦であり、職業としては無職とカテゴライズされたものの中にも相当数の大卒者が含まれていた。GLUは高学歴層が過剰代表された政党であったが、その傾向は現在まで続いて

いる。緑の党の党员の実に72%が高等教育を受けており、全ての政党の中で際立って高い値を示している⁹。

2. 社会的な関係性という視点からの分析

ここからは、ハノーファー市内の選挙区の推薦人名簿をもとに、GLU支持者を社会的結合という視点から論じてみたい。この名簿に記載された住所から、彼らの住居の分布を分析すると、そこにはすでに都市住民による生活コミュニティが形成されており、それがまるごとないし一程度の割合でGLUの支持者としてすくい取られている事実が見えてくる¹⁰。カフェやレストラン、そしてお互いの住居などの、生活コミュニティという公共空間の中での相互交流は、1960年代に徐々に人々の意識の中で生じてきていた「政治的



ハノーファーの行政区分

9 Niedermayer, Oskar: „Die soziale Zusammensetzung der Parteimitgliedschaften“, in: HP: Bundeszentrale Politische Bildung.
 10 森政稔は、ここに共同性の存在を指摘しつつ、それが伝統的な共同体的関係とははっきりと異なっていた点を指摘している。筆者もこうした立場に同意する。森政稔『戦後「社会科学」の思想』（NHKブックス 2020年）165頁。

なるもの」に対する変化の影響を受ける形で「政治的な行動」のインキュベーターとしての地位を獲得していた¹¹。こうした地域住民ネットワークの一部は、緑の運動、ここにおいてはGLUへの支持へと自らの政治的行動を具体化していった¹²。以下都市における地域コミュニティというマイクロな空間に立ち入っていきたい。

2-1. 生活コミュニティの存在とそのGLUへの動員

オストシュタット(Oststadt)

ハノーファー中央駅北東部に位置するオス

トシュタット地区は、人口に占める大卒者の割合や持ち家率の高さ、それと関連する形で地価も高く、中間層の居住地域と性格付けることができた。ここにいくつかのGLU支持者の「ホットスポット」が存在していた。このことは、居住区内に都市住民による生活コミュニティが形成されており、そのコミュニティ自体を動員する形で、GLU支持者集団が形成されたことを示していた。

例えばこの地区のメインストリートであるベーデカー通り(Bödekerstr.)のわずか100メートルの空間だけで、13名の住民が、GLUの推薦人になることに同意していた。具体的に



オストシュタット地区

- 11 森政稔は、この時代政治的なものを捉える枠組みの変化が生じていたことを指摘している。この時代の運動は、狭い意味での政治から外に溢れ、そこでは生活のあらゆる面に政治があると語られるようになっていた。森政稔『戦後「社会科学」の思想』162頁。
- 12 この推薦人名簿に記載された住民の多くは現時点においても恐らく存命中である。そのプライバシーへの配慮のために個人についての記述に際して、名字の最初のイニシャル数文字のみを挙げた。また括弧内の数字は年齢である。

は32番地にMe. (59)、Tr. (43)、Kr.夫妻 (37、37)、He. (29)、33番地にDo. (25)、Pr. (23)、Se. (24)、An. (22)、Br. (23)、35番地にHe. (25)、36番地にKl. (36)、42番地にBä. (37)といった具合であった。

西端でバーデカー通りと接し、三位一体教会の前を走る総延長が80メートルほどしかないヨーク通り(Yorkstr.)では、Do. (24)、Va. (24)、Ba. (25)、Gi. (26)、He. (29)、De. (30)、Sa. (28)、Jü. (30)、K. (37)、Ma. (71)の計10名が、推薦人名簿に名前を記載していた。Da. (29)、Pr. (38)、Te. (38)、We. (43)、Me. (29)の計5名の推薦者の住居は、ヨーク通りと北側100メートルで並行するオストヴェンダー通り(Ostwenderstr.)沿いであった。

ここで挙げた3つの通りはコの字を描く形でお互いに接しており、それぞれの住居は最も離れている者同士でも直線距離で100メートルほどであった。また彼ら全員の住居は、一つの中庭を共有する形になっており、日常的に交流があったことを想像させる。

また同様に推薦人として名を連ねている、レルヒェン通り(Lärchenstr.)に住むMen. (24)、ルマン通り(Rumannstr.)のBi. (31)、アム・ホルツグラベン(Am Holzgraben)のRo. (35)、ビューターズヴォルト通り(Bütersworthstr.)のTj. (35)、ラムベルク通り(Rambergstr.)のBer. 夫妻(42, 43)、リスター・マイレ(Lister Meile)のSchw. (28)の住居は、全てバーデカー通りから半径300メートル以内に存在した。その意味でこれらの人物もこの地区の生活コミュニティに組み込まれていたと想像できた。

ツォー(Zoo)

オストシュタット地区の南東側は、ツォー(動物園)地区と呼ばれていた。その名の通り、動物園や市立公園アイレンリーデ(Eilenriede)、その他スポーツ施設が面積の大部分を占める地区であるが、その南西部分に閑静な住宅地

が広がっている。この地区もGLU支持者が集中していた場所の一つであった。この地区に居住していた支持者として、フリーデン通り(Friedenstr.)のv. Ek. (38)、L. (38)、エッレルン通り(Ellernstr.)のBe. (36)、ティードゲ通り(Tiedgestr.)のSchm. (37)、ホルタイ通り(Holteistr.)のFe. (74)、Kr. 夫妻(共に35歳)、ルードヴィヒ・ブルン通り(Ludwig-Brun-Str.)のFi. (64)、プラートナー通り(Plathnerstr.)のSchl. (38)、ネットェルバック通り(Nettelbeckstr.)の家族K. (81, 39)、Kr. (55)、Ke. (77)がいた。彼らの住居はこの住宅地の中心に位置するギムナジウムの半径150メートルの範囲内に収まっており、日常的な生活コミュニティが形成されていたと想像される。また自筆が要件となっている推薦人名簿において、彼らの名前はほぼ連続して記載されており、この事実も筆者の推測を補強しているであろう。

ジュードシュタット・ブルト(Südstadt-Bult)

ツォー地区からSバーンの線路を挟んですぐ南側の地区、中央駅から見ると南東部に位置する地区はジュードシュタット・ブルトと呼ばれていた。この地区は、伝統的には市民層の居住区として知られており、第二次世界大戦後は公務員の居住者が多い地区として知られていた。1970年代以降、中間層に属する比較的若い年齢層の居住者の割合が増えていた地区でもあった。この地区にもGLU支持者が多かったが、とりわけ地下鉄シュレーガー通り駅(Schlägerstr.)とアルテンベケーナー・ダム駅(Altenbekener Damm)駅の間にある、半径約400メートルの地域内に推薦人の住居が集中していた。

この地区を南北に貫くヒルデスハイム通り(Hildesheimer Str.)がメインストリートであったが、上記の地下鉄路線はその真下を走っていた。この通りには96番地にBa.夫妻(28, 35)が住んでいた。ヒルデスハイム通りに交差する形で北から、バウム通り(Baumstr.)に

Li. (24)、デトモルト通り(Detmoldstr.)にBe. (40)、ゾンネンヴェーク(Sonnenweg)にNi. (19)、アンネン通り(Annenstr.)にHa. (25)、Pi. (29)、ヴァイン通り(Weinstr.)にPa.夫妻(50, 56)が住んでいたが、いずれもGLUの推薦人となっていた。

地下鉄シュレーガー通り駅からすぐ東にルター通り(Lutherstr.)が延びていたが、駅からわずか100メートルほどの道路沿いに、Dü.夫妻(38, 41)、Kr.夫妻(54, 56)、Kü.夫妻(40, 43)、Sp.夫妻(34, 38)、Sch.夫妻(38, 43)、Kn. (55)、Mo. (32)、Fo. (48)が支持者として名前を連ねていた。またこの挙げた5組の夫婦のうち4組は、同じ集合住宅に住んでおり、またお互いの年齢もそれほど離れておらず、家族ぐるみのつきあいがあったと考えるのが自然である。またMo.の場合、近隣に住

む兄と妹もGLUの支持者となっており、生活コミュニティと血縁関係が結び付く形で支持者ネットワークが拡大した例と言えた。

その1ブロック南側にあるフェルド通り(Feldstr.)にFr. (28)、Wi.夫妻(22, 31)、シュトルツェ通り(Stolzestr.)にGa. (23)、Ko. (21)、Wo. (21)、レーデン通り(Redenstr.)にNo. (31)、ハイドロロン通り(Heidornstr.)にKl. 夫妻(41, 42)、ティーステ通り(Tiestestr.)にRe. 夫妻(29, 31)、ベーマー通り(Böhmerstr.)にWi. (59)、そしてザル通り(Sallstr.)にはSa. (22)、Bu. (25)、Le. (26)、Sch. (26)、No. (27)の5名の女性の名前があった。

またシュトルツェ通りと同じブロックにあるクラウゼン通り(Krausenstr.)27A番地には、特に支持者が集中していた。この建物は、構造上10世帯までの居住が可能であったが、



ユードシュタット・ブルト区

推薦人リストを見ると、Bo. (79)、Bu. (27)、Gl. (36)、Ko. (34)、Kow. (59)、Kr.夫妻 (29, 34)、家族Mü. (50, 51)、家族Va. (48, 51, 30)の8世帯の計12名の名前が載っており、また彼らの氏名は、ほぼ連続して記載されている。彼らの年齢層、家族構成は、20代の若者、恐らく独居老人である70代女性、そして30代、40代、50代の（同居する子供のいる）夫婦と多様であった。しかしながら近隣住民として相互ネットワークが機能しており、その大部分がそのままGLUへの支持者となっていたことを示す一例である。

地下鉄ガイベル通り駅(Geibelstr.)においてメインストリートであるヒルデスハイム通りと交差し、東西に延びるガイベル通りも、GLU支持者が多く居住していた。21番地だけでGe.親子(20, 55)、家族Sch. (47, 54, 21)、v. Fr.親子(56, 18)、Wa. (59)の8名が署名しており、その他にも同じ通りにRe. (48)、F. (69)、Rü. (58)、Reu. (76)、Ew. (44)、Tr.親子(57, 21)の名前があった。

さらにその南側には、ヴレーデ通り(Wredestr.)のGa. (44)、ハインリヒ・ハイネ通り(Heinrich-Heine-Str.)のSchl. (41)、Hi. (39)、アルテンベケーナー・ダム(Altenbekener Damm)のGro.夫妻(28, 29)、De. (42)、Ba. (37)の名前があった。またブレームホーフ(Brehmhof)のEh. (39)やビショフスホーラー・ダム(Bischofsholer Damm)のMe. (22)といったようにSバーンの線路を越えて東側の地域にも一定程度の支持は広がっていた。

この地区のメインストリートであるヒルデスハイム通りの西側にも広範に住宅地が広がっているが、GLUの支持者としてはハール通り(Haarstr.)のWa. (48)、アウフ・デム・エマーベルゲ(Auf dem Emmerberge)のRe.夫妻(47, 49)、ヴィーゼン通り(Wiesenstr.)のBl.夫妻(34, 39)の名前が見られるのみであった。

ノルドシュタット(Nordstadt)

中央駅北西に位置するノルドシュタットは、ハノーファー大学のキャンパスが位置しており、地区人口に占める大学生の割合が高い地区であった。またそれゆえにレストラン、パブ、カフェなどが集積する、いわゆるスツェーネと呼ばれる地区でもあった。この地域はハノーファーの他の地区と比較してもGLUの支持者が多く、また極めて狭い空間に彼らが集中していた。

例えばハノーファー大学のキャンパスに直接面していたイム・モーレ(Im Moore)は、この地区において最も支援者が集中していた通りであった。33番地だけで、Li. (49)、Fe. (27)、G. (36)、Br.夫妻(34, 35)、We. (26)、Na.夫妻(31, 32)の8名、35番地にはSp. (26)、Pf. (27)、Am. (26)の3名、37番地にBa. (42)、Ov. (30)の2名、39番地にHu. (64)、S.夫妻(63, 64)、Ma. (42)、Ho. (30)の5名、17番地にBi. (68)、Br. (24)、Ho. (26)、Fr. (24)、He.夫妻(55, 62)、Hi. (49)の7名、その他の番地にもHa. (33)、Kl. (79)、Br. (84)の3名の名前が記載されていた。つまりわずか150メートルほどの空間で28名が推薦人となっていた訳である。

またこのイム・モーアとほぼ垂直に交差するアステルン通り(Asternstr.)沿いにも同様にGLU支持者の住居が集中していた。13番地のFi. (67)、21番地のSch. (62)、23番地のHu. (41)、Ba. (58)、Ri. (22)、25番地のMa. (36)、Kö. (58)、Di. (31)、27番地のWe.夫妻(26, 30)、Bal. (42)、Ro. (57)、Ma. (21)、3番地のGa. (67)、Ber. (22)といった具合に、こちらも200メートルほどの空間に15名の支持者が居住していた。またアステルン通りから南東に50メートルほどに位置する Korn通り(Kornstr.)にも支持者としてWa. (68)、Schr. (32)、Pa. (63)が居住していた。ここで言及した空間はおよそ200メートル弱四方の広さであり、日常生活におけるコミュニティ



ノルドシュタット地区

が形成されていたことが想像される。またこうしたコミュニティは、連邦共和国の年齢構成の平均と比較すれば、確かに大学生と推測される20代の割合が高いものの、80代までも含んでおり、特定の年齢集団だけから構成されているとは言えなかった。

ファーレンヴァルト(Vahrenwald)

ドイツ国鉄(現ドイツ鉄道)の線路を挟んでノルドシュタット地区のすぐ北側は、ファーレンヴァルト地区と呼ばれている。この地区にもGLU支持者が一定程度存在していたが、それはダーウィン通り(Darwinstr.)とそれに50メートルほど離れて並行するケプラー通り(Keplerstr.)に集中していた。ダーウィン通りには、Mo. (49)、Kl. (16)、Sc. (53)、Ta. (50)、Pr. (76)、Ne. (69)、Ri. (25)、Ki. (24)、Fe. (65)、Fa. (21)、Re. (21)、Ca. (31)、Sp. (50)の13名、ケプラー通りにはKo. (23)、Br. (21)、

Ja. (19)の3名の名前が記載されていた。全員が一つの中庭を共有するブロックの中に居住しており、日常生活コミュニティがGLUへの支持者を獲得する上で大きな役割を果たしていたことを示している。

リックリンゲン(Ricklingen)

リンデン・リンマー区のさらに南に位置し、ハンノーファー市最南端に位置するリックリンゲン区は、1970年代中頃まで独自の行政単位を形成していたが、1974年自治体再編によりハンノーファー市に編入された地域であった。地下鉄のシューネマン広場駅を中心として、半径200メートルほどの空間に、支持者の住居がかなりの数存在していた。

例えばこの地区のメインストリートと言えるリックリング・シュタット通り(Ricklinger Stadtweg)だけでも、W. (53)、B. (22)、L. (85)、M. (37)、Bl. (56)、Bo. 夫妻 (59, 60)、St. 夫



リックリンゲン区

妻 (43, 52)、Se. (71)、P.夫妻 (33, 41)、Sch. (56)、Lu. (50)、H.夫妻 (48, 49)、We.夫妻 (51, 52)、Pr. (29)、He.夫妻 (50, 53) の計21名が支持者として名前を連ねていた。この中には、この地区のGLUの候補者であったハンス-ハインリヒ・プリース(Prieß, Hans-Heinrich: 37)の妻も含まれており、リックリンゲン地区の地域コミュニティが夫妻を中心としてGLUの支持者のコミュニティとして機能していた。さらにこのコミュニティは近隣の通りに広がっていた。

リックリング・シュタット通りから80メートルほど東側に入ったネットェマン通り(Nettemannstraße)と、それと並行するヴィルフル通り(Willführstraße)、そしてそれに接するシュペール通り(Sperlstraße)には、

Fa. (69)、Sch. (65)、Jü. (75)、Te. (60)、Pr. (74)、Gi. (59)、Me. (72)、Bo. (64)、Kl. (72)、Sl. (69)、Fi. (54)、Sche. (35)、Si. (69)、Be. (65)、Pe. (41)の15名が居住していた。リックリング・シュタット通りの東側150メートルの所を並行するシュタメ通り(Stammestr.)にもGLU支持者が数多く居住していた。Ma. (38)、Me. (23)、No.夫妻 (52, 65)、Du. (25)、An. (24)、Meh. (67)の7名がそれであった。

リックリング・シュタット通りがこの地区のメインストリートだとすれば、シューネマン広場駅付近でそれと交差して東西に走るプファール通り(Pfarrstr.)は、それに次ぐ重要な通りと言えた。Hü. (45)、Rü.夫妻 (51, 65)、Ru. (23)、Ko. (34)、Be.兄弟 (54, 48)、Kö. (37)、Wa. (72)、Li. (28)の10名がこの通

り沿いに居住していた。

さらにプファール通りの北西側のリックリンゲン公園を取り囲む形の街区にも支持者の住居が点在していた。バングェマン通り(Bangemannweg)のM. (41)、H. (50)、ヴァインシエンケンヴェーク(Weinschenkweg)のMe. (23)、Bö (31)、ペーベル通り(Bebelstraße)のSt. (40)、そしてフリードリヒ・エーベルト通り(Friedrich-Ebert-Str.)のPa. (64)、Ja. (37)、Er. (47)、Pi. (33)であった。

プファール通りのすぐ南側を並行して走り、1つのブロックを形成していたヘンケルヴェーク(Henkellweg)には、Ja. (59)、Ro. (59)、Mo. (31)の3名が居住していた。そのさらに100メートルほど南側を並行して走るヘーフナー通り(Höpfnerstr.)も支持者が集中していた。2番地のRi. (42)、Pf. (21)、Er. (71)、Ha.兄弟 (28, 32)、3番地の家族Ae. (36, 34, 66)、Fr.夫妻 (59, 62)、4番地のPi. (40)、7番地のHu. (40)、8番地のWe. (24)、9番地のBe. (66)の14名が、道路の両側のわずか50メートルほどの空間に居住していた。さらにこの通りは、リックリング・シュタット通りと西端で接して一つのブロックを形成していたが、すでにリックリング・シュタット通りの住人として言及したBo.夫妻 (59, 60)、St.夫妻 (43, 52)はこのブロックに住居があり、ヘーフナー通りの住民とコミュニティを形成していたと考えられる。またヘーフナー通りの支持者も全てこのブロック内、もしくはそれと向かい合った場所に住んでいた。

プファール通りの南西側に目を向けてみると、プファール通り、ゲスマン通り(Gesmannstr.)、ヴァスマン通り(Waßmannstr.)、ノルトフェルト通り(Nordfeldstr.)で四方を囲まれた短辺30メートル、長辺100メートルの中庭を共有する長方形のブロックにもGLU支持者のコミュニティが存在していた。近接してギムナジウムもある閑静な住宅地であるこのブロックには、Pl. (33)、Fi. (61)、Mo. (23)、Fo.親子 (69, 39)、Tu. (41)

(以上ヴァスマン通り)、No. (39)、Ad.夫妻 (38, 38) (以上ゲスマン通り)、Le. (78)(ノルトフェルト通り)が居住地していた。またノルトフェルト通りと北端で接するシュールヴィンケル(Schulwinkel)にもSchw. (32)、Sch.夫妻 (52, 54)、Dö. (53)が住んでいた。

オーバーリックリンゲン(Oberricklingen)

リックリンゲン区の南西部は、行政区域としてさらに細部化されて、オーバーリックリンゲン地区と呼ばれる。一般的に交通量の激しい自動車道の存在は、地域コミュニティを分断すると言われるが、オーバーリックリンゲン区は国道(Bundesstraße)6号線、65号線、217号線によって、北そして東西の三方を囲まれる形となっており、その一辺が800メートルほどのほぼ正方形の地区である。この地域にも生活コミュニティを基礎とするGLUネットワークが存在していた。

この区の中央を東西に走るヴァレンシュタイン通り(Wallensteinstr.)は、その通りに沿って路面電車も走っておりメインストリートとなっていた。その南側のルドルフ通り(Rudolfstr.)にDr.夫妻 (28, 35)、フリードリヒ通り(Friedrichstr.)にMe. (50)、アム・ロートドルン(Am Rotdorn)にTo.夫妻 (40, 43)、ゲッティンガー・ホーフ(Göttinger Hof)にBa. (44)、ロートブラーケン(Rodbraken)にDu.夫妻 (37, 40)、Ba. (22)、La.夫妻 (34, 42)、トルステンソン通り(Torstenssonstr.)にJo. (23)、ジュートシュトリュッケン(Südstrücken)にHe. (25)の13名が住んでいた。また国道6号線と平行して南北に走るゲッティンゲン通り(Göttinger Chaussee)は商店街となっており、ここにBu. (63)、La. (68)、Sch.夫妻 (34, 35)、Tr.夫妻 (62, 70)が住んでいた。

ヴァレンシュタイン通りの北側には、ヴァレンシュタイン通りにM. (47)、フリードレンダー・ヴェーク(Friedländer Weg)にDu.親子 (22, 55)、ムンツェラー通り(Munzelerstr.)

にFr. (20)とSp. (43)、ローデンベルグ通り (Rodenberger Str.)に家族Lo. (48, 51, 22,18, 20)、Ge.夫婦 (35, 42)、Gr. (69)、Lo. (35)、ロースカムプ(Rohrskamp)にMi. (45)、そしてグロノ通り(Gronostr.)のKu. (37)が居住していた。

2-2. 家族

ここまでGLUの支持者は、地域の生活空間を拠点として成立していたコミュニティを媒介として獲得されてきたことを示してきた。それ以外のネットワークの存在についても想定されるが、そうしたものの中で最も一般的なものは家族であろう。

データが存在する357名のうち136名、割合にして38%が一家の中で複数人が推薦人に名を連ねていた。それは家族単位で数えた場合、63組であった。その構成として圧倒的な数を占めるのが、夫婦二人で支持者となっているケースであった。全部で44組が夫婦で推薦人に名前を連ねていた。これに子供ないし親も加わって推薦人になっているケースが4組あり、オーバーリックリンゲン地区で取りあげた家族Lo.のように夫婦と息子3人という、恐らく同居する家族全員が推薦人になっていたようなケースも見られた。夫婦の年齢を年代別に分類してみると、30歳までが1組、40歳までが18組、50歳までが11組、60歳までが11組、それ以上が7組となっていた¹³。一般的に緑の運動の支持層は30代以下が多いと考えられてきたが、家族ぐるみで支持していた層に限って言えば、それにあてはまらないケースも相当数見られることがわかる。

上記に分類されない15組の家族関係は、親子ないしは兄弟・姉妹であった。ただしこうしたケースは、実際の家族構成は夫婦とその子供であり、両親のどちらかがGLUを支持に同意しなかったことにより、こうした形

になった可能性もあり得る。

またツォー地区ネットルベック通りの家族K. は、祖父と孫による世帯と想像される。ドイツにおいては高齢の祖父母が大都市に居住し、その成人した子供達が田園地帯に居を構えているという例が珍しくない。そしてその孫が進学等によって大都市に居住することになった際に、祖父母の住居に転がりこむことによって祖父母と孫による世帯が形成されることになる。また地方分権の伝統により、ドイツでは各州にそれぞれ同規模の総合大学が設置されているため、学生は自ら居住する州内の大学に進学する傾向が強い。そこでこうした祖父母・孫による世帯が形成される可能性は高くなる訳である。

また親子ないし兄弟・姉妹が共にGLUの支持者となっているケースの中には、それぞれの住所が異なっている例がいくつか見られた。例えばイム・モーレとロートブラーケンにそれぞれ住んでいたBa.親子やブファラー通りでそれぞれ別の住居を構えていたBer.兄弟がそれであった。こうしたケースでは、どちらかが先にGLUの支持者となり、他方にもその支持を呼びかけたと考えられる。こうした住所を異にする家族ぐるみの支持者は、それぞれの生活コミュニティネットワーク同士を結ぶハブとしての役割を果たしていた可能性が高かった。例えばリンデン選挙区の候補者であったプリースは妻だけでなく、彼らの母親も支持者に加わっていたが、彼女は同時に地域高齢者ネットワーク内に支持者を拡げる役割を果たしていた。

2-3. 高齢者ネットワーク

これまでGLU支持者ネットワークが血縁や生活コミュニティを土台に拡大したことを指摘してきた。そうした土台として機能した可能性として指摘できるものがもう一つあ

13 夫婦のいずれかのうち年齢の高い方を基準に分類した。

る。それは高齢者同士のコミュニティである。先ほどリックリンゲン地区のヴィルフェール通りとそれに隣接するシュペール通りという狭い空間の支持者について言及した。そこで推薦人の性別と年齢に着目した時、59歳、60歳、64歳、72歳、72歳（以上男性）、65歳、65歳、69歳、69歳、74歳、75歳（以上女性）となる。ここに高齢者コミュニティが成立しており、それがかなりの割合でGLU支援者としてすくい上げられた可能性を指摘できる。さらにここで挙げた74歳の女性はリンデン選挙区のGLU候補者の母親であり、この高齢者コミュニティの動員に向けて恐らく彼女が中心的な役割を果たしていた。

さらにこうした高齢者コミュニティは、それ自体として閉じたものではなかったことも想像される。なぜなら推薦人リストにおいて、この高齢者集団の氏名は連続して記載されているが、その間にこのブロックに居住するSch. (21)など、比較的若い年齢層の氏名も見られるからである。おそらくこうした高齢者との日常の付き合いの一環として推薦人となることに同意したのであろう。

3. ヴォーンゲマインシャフト (Wohngemeinschaft: WG)

最後に「緑の運動」ないし「左派オルタナティブ文化」と極めて親和性の高い、もう一つ別な形の社会的結合の形態について指摘しておきたい。GLUの推薦人リストを注意深く観察して見ると、ある特徴的な居住形態に気付く。それは苗字の異なる人物が、同じ番地に2～5名居住しているケースである。それは

とりわけオストシュタットやノルドシュタットといった中間層の多い居住区や大学地区に集中していた。またその居住者の年齢は、ほとんど例外なく20代前半から30代前半である。これは一体何を意味しているのであろうか。

3-1. 歴史とその実情

1960年代頃から主として大学生の間の普及していた居住形態として、ヴォーンゲマインシャフト(以下WGと略す)というものがある。簡単に言ってしまうと、本来世帯向けに建設された集合住宅内の住居ないし一軒家に、家族ではない複数人が共同で居住するという居住形態である。WGとして利用される物件は一般的に賃貸物件であるが、法的には代表者1名が賃借人となり、他の居住者はその賃借人と転借契約を結んで転借人として居住することになる。我が国と異なり、連邦共和国において転借契約の締結は一般的に認められているため、こうした居住形態は広く普及することになる¹⁴。

こうした居住形態は、北欧、ドイツ、オーストリア、スイスなどにおいて広く見られるが、その理由として以下のような点を指摘することが可能であろう。1960年代以降、ヨーロッパにおいてドイツも例外ではなく、学生数は急激に増大し、またその大部分は都市に集中していった。しかしながら中世以来の伝統により、都市においては建築基準が厳しく、既存の世帯向けの住宅を解体し、増大する学生単身世帯の向けの住宅を建設することによって、その需要を吸収することは困難であった。そこで多くの学生が本来世帯向けの住宅を借り上げ、自らの住居として共同利用することにより、学生向け住居不足を解消

14 我が国においてこうした居住形態は、一般的に「シェアハウス」と呼ばれているようである。しかしながら我が国のシェアハウスは、賃貸借の法的関係のあり方、その成立の理念と成立の歴史的経緯、さらに居住形態の実態という点において、ここで紹介した事例とほとんど共通点を持たない。そこで誤解を避けるために、本書ではあえてシェアハウスという名称を使わないことにした。

し、かつ家賃を折半にすることで経済的負担を抑えようとした。

さらに居住を目的とする賃貸契約は、一般的に有期契約が認められていない。それは一方において居住者の権利を保護する上で有効である。しかしながらそれは、賃貸人の側の都合によって賃借人の退去を求めることが事実上不可能であるということの意味するため、賃貸人は家賃収入の点を含め、長期的に安定的かつ友好的な関係を築くことができる賃借人を選別する傾向がある。それゆえに学生やキャリア初期にある職業人など、それほど経済的に優位にあるとは言えず、さらにそもそもその住居に期限を区切って住むことを意図している居住者にとって、都市内に賃貸住宅を見つけることは構造的に困難であった。それゆえに1960年代以降の現代的な意味¹⁵でのWGの歴史の初期において、その居住者の圧倒的な部分は、学生や職業訓練生、そして職業生活に入ったばかりの彼らの先輩であった。

WGの一般的な形態として、各個人の個室と共同のキッチンおよび居間が備えられ、その運用や同居者の選定等に関して多くの場合、高度な自治が機能している¹⁶。こうした運用が行われる前提として、WGという居住形態が好まれた社会的な要因に触れておく必要がある。1950年代以降、連邦共和国は一般的に「経済の軌跡」と呼ばれる経済成長

を経験し、人々の物質的な意味での生活水準は著しく向上した。また国家による社会保障システムの整備は、人々の伝統的な意味での地縁ないし階級内共同体による相互扶助システムへの依存の度合いを弱めることになった。また都市への人々の流入も、こうした傾向の助長に一役買うことになった。

こうした伝統的な共同体の解体傾向が人々に強く意識されるようになったその瞬間に、とりわけ若者を中心としてそれへの反動が見られるようになる。その具現化形態の一つがWGであった。また多くの場合、こうした形成されたWG居住者たちの多くは、この時期急激に達成された物質主義社会に対して多かれ少なかれ批判的な姿勢を示していた。敢えて言うならばWGの居住者を内的に結び付けていたのは、ドイツの多数派社会ないしは少なくとも年長者達がそれほど疑念を感じなかった物質主義社会に対するシニカルな態度、言い換えるならば左派オルタナティブな態度であった。ただし様々な統計調査が、当時の若者のかかなりの部分が左派オルタナティブな価値観に影響を受けていたことを示す時、WGという居住形態が、若者を左派オルタナティブ化させたのか、それとも左派オルタナティブな若者がWGという居住形態を好んだのかという点に答えることは難しい。恐らく双方が影響を与え合っていたというのが事実に近いと思われる¹⁷。

15 近代家族の構成員以外による私的領域における共同生活という理念と実践の歴史は、当然もつと遡ることは可能であるが、本稿の範囲を超えるものである。

16 筆者も1990年代の留学時代WGに居住していたが、入居に際して居住者による「委員会」への出頭を求められ、そこで共同生活をしようとする目的、経済状況に関する審査を受けた。

17 1981年に行われたある統計調査によれば、18歳から23歳の年齢層の30%が「オルタナティブ・抗議政党」に投票すると答えていた。また別な統計によれば、大学生の25%が自分のライフスタイルはどちらかと言えばオルタナティブであると答えていたし、12%が自分はオルタナティブ・ミリューに属していると考えていた。またオルタナティブ・ミリューの牙城と言えたフランクフルトではその数値は20%に達していた。さらに自分のライフスタイルが西ドイツのメイストリーム文化とオルタナティブ文化の接点にあると答えていた数値は、フランクフルトの大学生に限って言えば40%に達していた。Reichart, Sven (Hrg.), *Das Alternative Milieu*, S. 12.

ともかくWGという居住形態が、単に経済的・住宅政策的な要因に規定された存在ではなく、新しい形での協同意識に裏付けられたものであるということは、その後の歴史を見たとき明らかとなる。例えばWGに関する不動産情報を今日インターネットで検索すれば、都市部を中心におびただしい数の物件が提供されていることに、すぐに気がつくはずである。また1970年代以降に建設された大学の学生寮は、ほぼ全てWGの形態での居住することを前提とする構造となっている。それは大学当局および建築家がこうした居住形態が協同意識の醸成にとって有効であり、またそうした協同意識の育成が望ましいと考えていた証左と言えよう¹⁸。

さらにシニアWGや「住宅プロジェクト(Wohnprojekt)」ないし「建築共同体(Baugemeinschaft)」と呼ばれる居住形態の存在もWGが協同意識という理念面に裏付けられている事実を示している。シニアWGはその言葉の通り、シニア世代の居住者によ

て形成されているWGである。彼らがWGでの居住を選択しているのは、経済的な理由ではなく、むしろそこで形成されるコミュニティに魅力を感じているからである。著者もいくつかのシニアWGに聞き取り調査を行ったが、その居住者は1940年代末から1950年代生まれの世代、つまりこの70年代に学生としてWGでの共同生活を送った世代が多いという印象を受けた。また彼らは、子供達が独立した後の生活として、血縁者よりも世界観の近い仲間と過ごす時間の方が、充実感が高いと感じているようであった。

また「住宅プロジェクト」ないし「建築共同体」というのは、通常2〜8件程度の複数の家族が資金を提供し合って共同で住居を建設するものである。多くの場合、各世帯は構造上、完全に独立しているが、共同の中庭を設置するなどによって世帯間の交流を容易にする工夫がなされている。また建設段階において仕様等について合意に達する必要があるため、通常各世帯間にはすでに密なコミュニケーションが成り立っている。筆者の友人の家族も「住宅プロジェクト」で自宅を建設したが、共同建設者はほぼ全て大学時代の友人であり、またそのうち何人かは学生時代に共同でWGでの生活を送っていた。また環境都市として有名なフライブルクにおいて1990年代から開発が始まったヴォヴァーン地区は、ここに居住することを望む住民に対して積極的に「建築共同体」方式で住居を建設することを推奨している¹⁹。



ヴォーン・プロジェクトの例（ハンブルク）

-
- 18 1970年代に建設された学生寮は、ほぼ全ての住居がWG形式を採用していたが、1990年代以降に建築された大学の学生寮の多くは、個別の浴室・キッチンを備えたタイプの住居の割合が大きくなってきているという傾向も指摘できる。
- 19 これについては以下を参照。中田 潤「ドイツにおける協同性について -その歴史と現在 ヴォヴァーン地区を題材に-」『まちづくりと市民協同性 茨城大学人文社会科学部市民共創教育研究センター研究報告書』2018年。78-96頁。

3-2. GLU支持母体としてのWG

前提となる説明が長くなったが、推薦人名簿に記載された、主として20代の同じ番地に住んでいることになっている人々は、つまりWGの住人であったと考えられる。

357名のデータの中には、WGを形成して居住していると思われるケースが最低でも11件、計34人が含まれている。WGが大学の学生寮ではなく、通常の住宅地域の世帯向けの住居を使っている場合、その構成員数は一般的に2~5名程度である。それを考慮に入れた場合、以下に挙げたケースの多くは、それぞれ個々のWG内の住人の大多数がGLUへの支持を表明していることになる。つまりWGという居住形態それ自体がGLU支持者のコミュニティ形成に一定の役割を果たしていたと言えた。

オストシュタット

Dor. (25)、Pie. (23)、Sei. (24)、An. (22)、Bre. (23)の5名は共にベーデカー通り33番地に居住していたことになっている。富裕層が多く、それゆえに家賃も高いこの地区の同じ番地に、極めて年齢の近い若者が、それぞれ別個に住居を構えていたと考えるのは不自然であり、この5人は共同でこの番地の集合住宅内に1~2軒のWGを形成していたと考えるのが自然であろう。そこから150メートルほど離れたヨーク通り12番地のDo. (24)、Va. (24)、Ba. (25)、Gi. (26)、He. (29)、De. (30)、Sa. (28)の7名も、恐らく1~3軒のWGを形成していた。また同じ番地に住むJü. (30)、K. (37)、Ma. (71)の3名や、通りをはさんですぐ向かいの9番地の居住者であるK. (37)の名がリストに連続して記載されており、WGに居住する若者がGLU支持者の拡大に一役買っていたと考えられた。

ジュードシュタット・ブルト

やはり中間層が多く住んでいたズードシュ

タット・ブルト地区においても何軒かのWGと思われる例が見られる。例えばアンネン通り11番地に住むHa. (25)、Pi. (29)はWGを形成していたと思われるし、ザル通り79番地のSa. (22)、Bu. (25)、Le. (26)、Sch. (26)、No. (27)の5名の女性も同様であった。ただし後者の場合、この番地の建築は10世帯以上が収容可能な5階建ての集合住宅であり、彼女たちは2つのWGに分かれて住んでいたのかも知れない。またGa. (23)、Ko. (21)、Wo. (21)もシュトルツェ通り47番地にWGとして住居を構えていた。この建物は明らかに富裕層向けの物件であり、その意味でも彼らが共同で賃借していた可能性は高い。

ノルドシュタット

ハノーファー大学あるノルドシュタット地区には多くのGLU支持者が存在していたことを既に述べた。とりわけ大学の校舎に隣接するイムモーレには支持者が集中していたが、その中でも17番地のBr. (24)、Ho. (26)、Fr. (24)の3名と35番地のSp. (26)、Pf. (27)、Am. (26)の3名はそれぞれWGに住むGLU支持者であった。彼らが中心となってこの通りの住人にGLUの支持を呼びかけていた可能性がある。

ファーレンヴァルト

そこから300メートルほど北にあるファーレンヴァルトと地区におけるGLU支持者はダーウィン通りとケプラー通りに集中していることを既に指摘したが、そのうちダーウィン通り15番地のRi. (25)、Ki. (24)と7番地のFa. (21)、Re. (21)の計4名はWGの住人であったと考えられる。彼らが中心となってこのブロックにおいてGLUへの支持を拡大したと思われる。またリンデン・ミッテ地区のタイヒ通り9番地もBr. (23)、He. (23)によるWGであったと考えられる。

おわりに

住民の社会的結合関係をミクロな次元で観察することにより、生活コミュニティ、WGという居住共同体、血縁共同体がそれぞれ基本的な単位として存在していることを明らかにした。さらにその単位の中の一定数が、その単位の境界を越えるハブ的な存在として他の単位との橋渡しをすることにより、より広範な複合的なネットワークが形成されていた。GLUは、この複合的かつ広範なネットワークを辿る形で支持を拡大していた。例えばWG内での生活を通して、そこに居住する若者たちの政治的社会化がなされ、結果的にGLU支持に至る。そのメンバーたちが近隣の住民や自分の家族にGLUへの支持を呼びかける。これに応えた親が、自分が属している高齢者コミュニティに支持を呼びかけることによって、今度は高齢者の中に支持が広がっていく。また近隣コミュニティに広がったGLU支持は、他方でそのコミュニティに属する各家庭の構成員に影響を与えていく、といった具体であった。その影響の連鎖の開始点とその伝播の方向については様々な可能性があると考えられるが、それ自体はそれほど重要な問題ではない。重要なのは都市空間

内においてこうしたコミュニティの複合的・重層的なネットワークが成立しているという事実であり、それに依拠する形でGLUへの支持が獲得されていったという事実である。

こうした重層的な社会的結合のネットワークを観察した時、一つの重要な集団が欠けていることに気付かされる。それは移民系住民である。1950年代後半以降結ばれた政府間協定により、1960以降西ドイツ社会には相当数の移民労働者が流入していた。1970年代末には彼らの存在により、連邦共和国は相当程度多文化社会となっていた。一般的に新しい社会運動、緑の運動は運動初期の局面においては移民系住民、とりわけトルコやモロッコといったムスリム系住民の取り込みに成功しなかったと言われているが、本章で分析した名簿を見る限り、そうした主張は正鵠を射ているようである。ムスリム系であるかどうかを判断する材料は、とりえず苗字に頼るしか方法はないが、リストに記載されたものでアラビア語系・トルコ語系と推測される苗字は1つしか存在しない。またそれは間接的に初期の緑の運動が、学生を含めた、高学歴・中間層による運動であったことを示すものであろう。

(なかた・じゅん 本学部教授)